

フランスのブレス地方におけるフランコプロヴァンス語——言語シフト、言語使用状況、言語再活性化

佐野 彩（日本学術振興会／上智大学）

フランコプロヴァンス語 (francoprovençal) は主にフランス、イタリア、スイスにまたがる地域で話されてきたロマンス系言語である。フランス、スイスに含まれる地域ではフランス語、イタリアに含まれる地域ではイタリア語等への言語シフトが進み、多くの地域で言語使用が著しく減少した。本報告では三つの国でのフランコプロヴァンス語の状況を確認した上で、フランスのアン (Ain) 県に含まれるブレス地方 (Bresse) に焦点を当て、フランス語への言語シフト、フランコプロヴァンス語の言語使用の現状、そして言語再活性化について検討する。ブレス地方はフランスではサヴォワ地方 (Savoie) とともに、フランコプロヴァンス語が比較的維持されていると言われる地域である (Bert & Martin 2013: 494 など)。データは、現地で開催したインタビュー調査と観察に基づくデータ、各種文献・資料を用いる。

ブレス地方では徐々にフランス語が浸透していたが、19 世紀末以降、フランス語による初等義務教育が普及し、両大戦間期を中心に農村部でも子どもの第 1 言語がフランス語に移行していった。第二次世界大戦後の交通の発展や農業の近代化による農村社会の変動、さらに第 1 言語話者の高齢化と減少により、1960、70 年代を過ぎると地域社会でのフランコプロヴァンス語の使用は激減する。現在ではすべての言語使用領域 (ドメイン) でほぼフランス語が使われているが、主に高齢の話者の会話、言語再活性化に関わる活動、種々の部分的な言語使用 (挨拶などの短い表現のほか、店名や催しでの使用など) で、非常に限られているもののフランコプロヴァンス語の使用も見られる。

日常的なコミュニケーションで主にフランス語が使われるようになったブレス地方では、大部分の場合、フランコプロヴァンス語は“敢えて”使用する言語である。ピヴォは、フランスにおけるフランコプロヴァンス語を言語の象徴的価値がコミュニケーションの道具としての価値を超え、その言語で発話するという行為が発話された内容以上に意味をもつ「ポストヴァナキュラー言語 (postvernacular language)」(Shandler 2006 など) とみなしている (Pivot 2014)。本報告では、ブレス地方で見られるフランコプロヴァンス語の部分的な言語使用の事例を取り上げ、言語再活性化においてこのような言語使用がもつ可能性を検討したい。

Bert, Michel & Jean-Baptiste Martin, 2013, « Le francoprovençal », Georg Kremnitz dir., *Histoire sociale des langues de France*, Rennes: Presses universitaires de Rennes, pp.489–501.

Pivot, Bénédicte, 2014, *Revitalisation de langues postvernaculaires: le francoprovençal en Rhône-Alpes et le rama au Nicaragua*, Thèse de Doctorat, Université Lumière Lyon 2.

Shandler, Jeffrey, 2006, *Adventures in Yiddishland: Postvernacular Language and Culture*, Berkeley: University of California Press.

本報告は、JSPS 科研費 21J00775/22KJ2749 (「フランコプロヴァンス語の再活性化における言語使用についての包括的研究」特別研究員奨励費) の研究成果の一部である。